

# 金沢城下をゆきかう人びとの「絵引」化

## 1 金沢城下の概観

現在、「百年後の国宝をつくろう」のキャンペーンのもと、往事の姿の復元作業が慎重に進められている加賀藩主前田氏の居城であった金沢城は、白山山系の末端、小立野台地が舌状に伸びる台地最先端部に築造されている。かつて、この場所には本願寺の別院金沢御堂が築かれていたが、天正8年(1580)、柴田勝家の攻撃によって陥落した。その後は、勝家配下の佐久間盛政が御堂跡を金沢城として同11年まで在城した。しかし同年4月、豊臣秀吉軍の先鋒として金沢へ進撃した前田利家が、能登府中城から金沢城に入るにおよんで、金沢は前田氏の城下町として整備され発展していくことになる。

金沢城下は、城を中心にして犀川、浅野川の両川に挟まれた町の中核となる地域から、両川の外側へと町域が広がっている。田中喜男『加賀百万石』(教育社歴史新書、1980年)によれば、城下建設は利家時代の第1次から利長時代の第2次、利常時代の第3次の建設段階を経て、寛文期にほぼ城下町としての基本骨格が形成されたといわれる。

前田利家は天正11年の入城後、城郭を修築し、城下町の建設を徐々に進めていった。城郭をめぐっては、城の正面を金沢御堂や佐久間盛政時代の西口から北側に移し、大手門を築いたことがあげられる。これにともなって、大手門に面して新たな町造りが行われ、商人・職人が中心の同業者の集住する尾張町・中町・今町・米町・塩屋町・博労町などの諸町が形成された。しかし、当時はまだ家中の城下集住は進行途中であり、また家臣のなかには城内に住む者も相当数いた。

慶長4年(1599)閏3月、前田利家が没すると、利長による城下町建設が行われた。利長は城を取り囲む外堀の外に、さらに城下を取り囲む東西内総構堀を造成した。これは徳川家康による加賀征伐の風聞に接した利長が、和戦両様の構えで家臣を総動員し、高山右近の指揮下、短期間で築いたものといわ

れる。続いて慶長16年、東西内総構堀のさらに外側に東西外総構堀が造成されるが、この工事は当時富山城に隠居していた利長にかわって領国運営にあたることになった前田利常のもとで行われた。また、利長の死去にともなって、富山城退隱の時に給された全ての隠居領の返還と家臣団の金沢城下への帰還が実施されることになり、これを契機にして家臣の屋敷地の整備、城内に住む家臣の城外への移動などが進められた。

金沢の城下町建設において、一大画期をなしたのは元和・寛永期であった。特に、寛永8年(1631)と同12年の大火は城下のほとんどを焼き尽くすに至り、結果としてこの災害が近世的な城下町建設のまたとない機会となった。主要な武家屋敷地は城郭周辺に配置され、町人地は北国街道沿いと内総構堀内、外総構堀内に置かれた。寺院は寺院群として、城下外郭の小立野・卯辰山・寺町に配され、城下防衛上の城砦としての役割も担わされた。また、町域の拡大も顕著にみられ、近郊村の農地などの市街地化が進んだ。藩が寛文元年(1661)に出した相对請地勝手令は、町人と百姓との間の土地の貸借を自由とするものであり、農地などの市街地化に拍車をかけた。そこで藩では、同6年、相对請地禁止令を出し、町域拡大に一応の終止符を打った。金沢城下の輪郭はこの寛文期にほぼできあがり、城下町としての基本骨格が定まることになる。

寛文期、金沢城下の人口は、武士については、藩士のほかに陪臣や奉公人を加えるならば優に1万人を超え、その家族も加えたならば5万人を超えるものと推定されている。また町人の人口は、寛文4年(1664)には5万5106人であったことが知られるから、武士と町人を合わせた人口は10万人を超えていた。ちなみに、明治初年の金沢の人口は12万3363人で、うち士族・卒・中間・小者の合計が6万1659人であったから、残りの6万1704人が町人・寺社の人口であったことになり、寛文期同様、武士と町人はほぼ半々の人口比であったことが知られる

〔「金沢城下」『日本歴史地名大系 石川県の地名』平凡社、1991年〕。また、同じく明治初年の金沢の面積は271万7500歩で、そのうち武家地は69.5パーセント、町人地22.8パーセント、寺社地2.7パーセント、城と兼六園5.0パーセントであった（同上）。つまり、武士と町人は人口ではほぼ半々であったが、居住地では武士の居住地は町人のそれより3倍の広さがあったことになる。

金沢に市制が施行されるのは、明治22年（1889）4月のことである。しかしそれ以降においても、今日にいたるまでその背後に寺内町としての記憶を鎮めながら、かつての城下町としての基本的性格、伝統を失うことなく金沢の歴史は重ねられてきているといえよう。

## 2 金沢城下をゆきかう人びと

土屋又三郎の著した『農業図絵』は、元来、金沢城下近郊に展開する農業を中心にした村の営みを、正月から12月にかけて月を追いながら描いたものである。ただ、そのなかに金沢城下の図が、正月、10月、12月の箇所挿入されている。その理由は、肥汲みや赤土蕪売り、薪売り、年貢納入などのために、村の百姓が金沢城下に出向いたからだろう。特に、正月の図は「金沢図」とされており、19ページにわたって城下の様子が描かれている。

そこで、「絵引」Ⅱでは、金沢城下を集中的に取り上げ「絵引」を試みることにした。

周知のように、『農業図絵』に関しては、清水隆久氏による長年にわたっての研究成果に基づく詳細な紹介が『日本農書全集』第26巻（農文協、1983年）誌上で行われており、本「絵引」もその成果のうえにある。清水氏の研究は、『農業図絵』の原本探索に始まり、写本の検討、著者土屋又三郎の生涯と土屋家の経営、図絵の成り立ち、図絵の農業分析はもとより、図絵一場面ごとの詳細な解説も行われており、一種「絵引」的な内容にもなっているといえる。例えば、「金沢図」の1枚に添えられた解説を引用すると、次のようである。

松並木も見られなくなり、人家もかなりこみ

合ってきた。しかし、いずれも農家のたたずまいである。今の有松から泉新町あたりであろう。通りには、近くの村里から夜明けを待ちかねたように肥汲みにやってきた村人がみえる。笠にみの、あるいは頬かむりに腰みの姿でいずれも肥桶をかついでいる。桶にはあいさつ用の大根、わらなどがみられる。旧暦の正月といえば今の二月、つまり厳寒の時期だから、畑に青菜などほとんどないころである。大根に緑の葉がついているのをみると、葉のついたいけ大根を掘り出してきたものであろう。その前を高下駄に杖、そして晴れ着姿の町人風の人物が足元を気にしながら歩いている。消え残りの雪でもあるのだろうか。手前左のほうには、手にちょうちんをさげた女がみえる。青の前掛が印象的だ。

清水氏の図ごとの解説は、このように非常に詳細である。解説中の「肥汲みにやってきた村人」「笠」「みの」「頬かむり」「腰みの」「肥桶」「あいさつ用の大根」「わら」「高下駄」「杖」「ちょうちん」「前掛」などを図中で特定し番号を付ければ、つまり「絵引」といってもよい内容をさえ備えているといえよう。したがって、ここで改めて金沢城下の図絵の一場面ごとに「絵引」を行っても、おそらく「屋下に屋を架す」の例え通りになってしまう恐れがある。そこで、清水氏の研究成果に少しでも新たな知見を加え「絵引」としての成果をあげるために、「絵引」Ⅱでは当面、金沢城下の図にあらわれる人物を特定に対象として取り上げ、「絵引」を試みることにした。図絵には通りをゆきかう多くの様々な人物が描かれており、城下町という都市の生活のあり方が、人々を「絵引」ことによってそれなりに明らかになるのではないかと考えるからにほかならない。また人物は、武士、僧侶、町人、女性と子ども、芸能・卑賤の民、百姓にグループピングすることが可能なので、各グループごとに「絵引」を行うことにした。

なお、「絵引」中における金沢城下の概要の記述にあたっては、煩雑になるので一々断ることは避けしたが、『金沢市史』通史編2・近世（金沢市、2005年）を大いに参照したことを記しておく。（泉）